はじめに

京都大学が法人化して1年が経った。法人化とは何か、大学改革は何かということは頭では分かっていても、現実に1年体験してみてこれ程とは思わなかった。予算関係の申請に次ぐ申請、企画委員会ヒアリング、総長ヒアリングを何度か経験した。昨年の秋以来、企画委員会のヒアリング、概算要求のヒアリング、特別予算（GP）申請のヒアリングと立て続けに3連投であった。何で俺にやらせるのだとの思いもあり、2月の現代GPのヒアリングでは、総長、副学長を前に思わず「昨年秋より教育学部案件につきまして私は皆勤でございます。先生方は、またお前か、もうお前の顔は見飽きた、もう見たいことないとお思いかも知れませんが・・・・」との口上から説明を始めた。この口上は、京都大学執行部には受けたようであったが、結果は競り合いになり他学部に惜敗した。

こうした雑務の増加は、講座の重要な仕事の滞りとなって現れ、教員、院生の研究成果発表の重要な場である『教育行財政論叢第9号』への投稿、編集事務がスムーズに進まなくなってしまった。筆者は結局投稿できなかった。院生諸君にはたいへん迷惑を掛け、申し訳なく思っている。しかし院生諸君には、筆者の置かれている状況を通じて今日わが国の大学が置かれている厳しい現実を感知して欲しい。その在り方についてはそれぞれの考え方があると思うが、就職後は少なくとも厳しい現状を批判するだけで自らは何も行動しないということは避けて欲しい。就職先として可能性のある私立大学一般にあっては、その危機感は国公立大学の比ではなく、積極的な組織貢献のできない戦力として期待できない人間はまず採用しない。

世間は「法人化」「改革」「競争的資金の獲得」・・・と騒いでいるが、院生時代は最も落ち着いて研究に打ち込める時期でもある。今を大切に研究成果を上げることを期待したい。

なお、英文校閲については、奈良大学教養部教授ジェームズ・スワン先生にお世話になった。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思う。

2005年3月31日

京都大学大学院教育学研究科
比較教育政策学講座
教授　高見　茂